

平成 26 年度 国立中央青少年交流の家

## 青少年教育指導者専門研修

平成 27 年 1 月 20 日（火）～1 月 23 日（金） 3 泊 4 日

### ○目的

青少年教育施設や教育行政及び地域等において、青少年の健全育成に携わる指導者に求められる、専門的な知識・技能を習得し、指導者としての資質・能力の向上を図る。



### ○参加者

青少年の健全育成に携わる者 計 36 名

### ○事業の内容

#### （1）「学びの場づくり」（実習）

講師：国立中央青少年交流の家 企画指導専門職 館 健一

研修をはじめるにあたって、お互いのことを知ることをねらったアクティビティを行い、参加者の緊張を和らげ、能動的な参加を促した。

参加者の研修に対する期待を共有し、ともに学ぶ仲間意識の醸成を試みた。



#### （2）「青少年教育の現在（いま）と未来（これから）」（講義）

講師：東北学院大学教養学部人間科学科 教授 水谷 修 氏



青少年教育の現状の一端を理解した上で、「非学校化」「面白さ」「たまたま・偶然」などをキーワードに、問題解決への方策について検討し、明日からの仕事や活動へのヒントの提供を受けた。

自分で考え、主体的に社会とかわかり、人間関係を作って新しい活動をおこすために、青年期を面白く生きる支援ができるかが、青少年教育の重要な役割であることを学んだ。

#### （3）「コミュニケーション能力を高めるグループワーク（ビブリバトル）の理論と実践」（講義・実習）

講師：千葉大学アガミック・リンク・センター 特任助教 小野 永貴 氏

活動の前半では、ビブリバトルを支える理論の説明と 4 人 1 組での実習を行った。一番大切なのはゲームとして「楽しむ」過程でコミュニケーションがより深まることを学んだ。

活動の後半では、より「内面の自己開示」につながるビブリバトルの運営上の工夫について、9 人 1 組の実習を通して主催する側の注意点等も含めて学んだ。



#### (4) 「ケーススタディで高める指導力（自己肯定感）」（事例研究・演習）

ミーティングファシリテーター：（公財）キープ協会環境教育事業部 課長 鳥屋尾 健 氏

事例1「自己肯定感を高めるキャンプ」発表者：（一社）ガールスカウト静岡県連盟 山本 尚美 氏

<事例1の概要>



「少女のための元気サポートプロジェクト」として、体験活動が自己肯定感に及ぼす効果を調査シートに基づいて説明を受けた。また、「女の子はもっと伸びる」という冊子を使い、最新の取組みも学んだ。その中でガールスカウトと世界的アケアブランド Dove が共同開発した「大好きなわたし～Free Being Me～（フリービーイングミー）」の一部である「鏡よ鏡」を全員で実習した。

事例2「きんたろうキャンプ」発表者：神奈川県立足柄ふれあいの村 福本 敏宏 氏

<事例2の概要>

神奈川県不登校対策事業の一環として実施。子供たちの元気な日常を取り戻してもらうことを目的としている。小さな成功体験を積み重ねることによって自信が付き、褒められたり感謝されたりするなかで自己肯定感を高め、さらに主体的・積極的になっていく姿が見られると説明があった。



#### (5) 「みんなでチャレンジ・みんなのチャレンジ～かかわりをかたに・つながりをかたに」(講演)

講師：NPO 法人えひめ子どもチャレンジ支援機構 事務局長 仙波 英徳 氏



無人島でのキャンプを通して、人が生活するのに必要な3つのショック「食」「職」「触」をテーマに、子供が企画・運営し汗をかきながら、異年齢との共同生活を通じて、「かかわる」ことの大切さと達成感を知り、さらに子供が自ら進む道を見つけ出す体験プログラムについて述べられた。

ものの「価値」は最終的に何で決まるのかという問いかけを、受講生全員に投げかけて講演を終わられた。

##### 《受講生の感想から》

- 大変充実した日々を過ごすことができました。たくさんの財産をいただきました。
- 理論と実践を学ぶことができ、とても良かったです。特に自分で経験できたことにより、本来の目的を正しく知ることができました。
- このような青少年教育に携わる指導者の研修の機会は少ないので、今後も継続して欲しいです。他施設での持ち回り開催も検討して欲しいです。

##### 《成果と課題》

- 青少年教育の指導者・リーダーとしての資質・能力向上につながる研修となった。
- 長く経験を積んだ指導者にとっても、初めて体験する研修方法や新たな切り口からの講義によって、自分の中に出来上がっていた「枠組み」を再考する機会となった。
- 3年連続・2年連続の参加者は常に新しい手法を求め、この研修に参加している。主催者は毎年新しい内容を取り入れながら、リピーターに更なる満足度を提供する必要がある。